【376】

氏　名（本籍）	都筑（つづく）　真（まこと）（茨城県）
学位の種類	博　士（体育科学）
学位記番号	博　乙　第　2444　号
学位授与年月日	平成 21 年 4 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**「トゥルネン＝スポーツ抗争」に関する歴史的研究** －「抗争」における C. ディームの役割を中心として－

主　査	筑波大学教授	博士（教育学）	阿　部　生　雄
副　査	筑波大学教授	博士（文　学）	佐　藤　臣　彦
副　査	筑波大学教授		岡　出　美　則
副　査	筑波大学教授	博士（教育学）	安　川　哲　夫
副　査	筑波大学准教授	Dr. Phil.（言語学）	森　　芳　樹

論　文　の　内　容　の　要　旨

（目的）

本論文の目的は、スポーツの伝播に伴って世界の各地域で生じた伝統的な身体文化との軋轢という文化抗争という視点から、ドイツの「トゥルネン＝スポーツ」抗争の実態と意味を解明しようとすることである。

（構成と内容）

第 1 章のトルゥナーのスポーツ批判（1881 年－ 1910 年代）ではドイツ・トルゥネン連盟（DT）の機関紙『ドイツ・トゥルネン新聞』、トルゥネン教師の雑誌『トルゥネン月報』、国民・青年遊戯促進中央委員会の機関誌『身体と精神』からドイツのツルネンからの批判を分析し、①平均、多面性を重視するトルゥネンと最高成績と一面性を重視するスポーこツ、②健康の維持・増進を主眼とするトルゥネンと身体を酷使するスポーツ、③愛国心や国民性の涵養を重視するツルネンと異国性のスポーツ、④ドイツ国民の共有財産としてのトルゥネンとスポーツの閉鎖性、⑤トルゥネンの共同体意識とスポーツの個人主義、⑥トルゥネンの愛国心とスポーツの国際性といった相違と、ツルネンからの批判が存在していたことを明らかにした。第 2 章の「スポーツ批判に対する C. ディームの反応（1907 ～ 1912 年）」では､ディームの『トゥルネンとスポーツ』の論考を分析し、ディームがトゥルネンの「平均的成績」､「多面性」とスポーツの「最高成績」､「一面性」の際を重視する一方で、健康の促進、人間の強化や「身体的、道徳的強化」という共通する点を主張し、両者の抗争を和解可能なものとして捕らえていたことを明らかにした。第 3 章の「ディームによる DT と DSB f L、DFB の和解の試み（1921 ～ 1941）」では、スポーツの統括権をめぐる DT と DSB f L（ドイツ陸上競技連盟）、DFB（ドイツフットボール連盟）との和解工作の背景には、1916 年開催予定であったベルリン・オリンピック組織委員会事務局長としての準備活動が存在していた。DT を統括していた会長のゲッツは、DT の組織内で行っている運動種目の統括権の専門分化を拒絶した。しかし、ディームの和解工作は実現には至らず、第一次大戦後に残された。第 4 章の「DT と 3 つのスポーツ連盟の一時的和解（1921 － 1925 年）」では、双方の和解が一時的に実現していく過程を明らかにしている。大戦後、DT と DSB f L、DFB が加盟す

るDRA（ドイツ身体運動委員会）は、「ドイツ国民への身体運動の普及」という目的に加え、戦争によって疲弊したドイツの復興と青少年の育成を推し進める中で、DT、DSBｆL、DFB、1920年以降にはDSVも加わって、DRAの活動に参加し、選手権開催における統括権交渉を行うようになった。1921年にはDRAの会長レヴァルトの仲裁により3つのスポーツ連盟とDTとの和解協定が成立した。DRAの事務局長としてディームはスポーツの「一面性」を打破し、「多面的」な身体形成を重視するトゥルネン的な身体活動をスポーツに取りこんだ。第5章の「純粋分離」によるDTと3つのスポーツ連盟の断絶（1921 − 1925）では、1921年の協定締結から1923年の「純粋分離」、さらにはDTのDRAからの脱退の過程を明らかにした。協定を不満とするDT幹部は1922年4月に協定を解消した。DTは独自の陸上競技、水泳、フットボールを統括するために1923年9月に「純粋分離」の純粋分離の実施を決議した。DTと3つ・のスポーツ連盟の関係の悪化は、各運動種目の統括方法に関して3つのスポーツ連盟と同様の見解を示していたDRAからのDTの脱退を導いた。つまり1923年からのディームとクーベルタンの書簡交流により、ドイツ人のIOCメンバーが選出される等、オリンピック参加の実現が高まる中で、1925年、参加を求めるDRAからDTが脱退することとなった。「DTと3つのスポーツ連盟の和解と統合組織の成立（1925 − 1936年）」では、DTのDRA脱退から、ディームのイニシアチヴによる1930年のDTと3つのスポオーツ連盟との和解、国内オリンピック委員会のDRAからの独立、1933年の帝国指導者連合による各運動種目の独自の統括権の公認、等を経て、和解の最終目標である「トゥルネン・スポーツ諸団体の統合」が、1936年に発足したDRL（ドイツ身体運動連合）によって達成されるまでの経緯を明らかにした。

（結果と考察）

結論として、本研究は、ディームがドイツのオリンピック復帰を図る一方で、DRAからNOCを独立させ、DRA内でのDTの権限を拡大することによって、DTとDRAの和解を図り、スポーツの組織編制を推し進め、オリンピックを中心とする国際交流を促進し、更にトゥルネンとスポーツという異なる身体運動文化の間に生じた問題に、双方の妥協点を見出すことによって「トゥルネン＝スポーツ抗争」を解決しようとしていたことを明らかにした。

審　査　の　結　果　の　要　旨

本研究は、イギリスのスポーツの伝播・普及によって各国で生じた身体運動をめぐる文化抗争に焦点を当てたもので、分けても一番大きな問題を孕んだドイツのトゥルネンを例に取り上げて、カール・ディームの役割を中心にその抗争の背景、原因、対立と妥協の経緯、そして問題の所在を明らかにしようとした研究である。従来の研究よりも更に精緻化した形で、ドイツにおけるトゥルネンとスポーツとの対立点を明らかにし、オリンピック運動によって両者の妥協が促進された点を浮かび上がらせたことは、高く評価できる。今後、ナチズムとの関連から、トゥルネンとスポーツの対立と妥協の問題を明らかにすることが期待される。

よって著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。